

令和5年度 霞ヶ浦学講座第3講「土浦の水害と先人の取組」実施結果

実施日時：令和6年3月2日（土）13:30-15:00

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：野田礼子 氏（土浦市立博物館） 参加者数：29名

テーマ：「土浦の水害と先人の取組」

講演概要

水辺の町、土浦

土浦の市街地は、筑波稲敷台地と新治台地に挟まれた桜川低地の河口に位置し、周辺には水田地帯が広がっています。江戸時代、土浦城の本丸は河川の流入によって形成された砂州の微高地上に築かれ、自然の地形を利用した幾重もの水路によって囲まれ、形づくられていました。土浦の町には、城の堀や川が縦横に流れ、城下町の南側の桜川は霞ヶ浦に注ぎ込んでいます。この桜川の氾濫と霞ヶ浦からの逆水（逆流）が、土浦の洪水の主な原因となっていました。

先人の取組

江戸時代には洪水が頻繁に起こっていたこともあり、洪水の原因や対策を考え、取り組んだ先人たちがいました。

長島尉信は、土浦の元禄期以降の洪水の様子を古記録や自らの見聞によって「土浦洪水記」として書き記し、土浦の洪水の原因には霞ヶ浦の「逆水」があると考察しました。

色川御蔭は、「防逆水私儀」を記し、土浦が霞ヶ浦の逆水に悩まされるようになったのは、利根川下流域の十六島の新田開発などに伴う堤防の築造により、霞ヶ浦が流水の出口を塞がれたような状態になったためと説き、堤防の補強や、堀や溝の浚渫、土地や道路への土盛りなど、逆水の対策を提唱しました。

色川三郎兵衛（色川英俊）の取組

「色川三郎兵衛」という名は江戸時代から明治時代にかけて、土浦を代表とする醤油醸造家の色川家で引き継がれた名前です。英俊は11代目にあたり家業の他に、明治時代に茨城県会議員や国会議員を務めました。土浦の洪水対策に力を尽くしたとされますが、書簡がわずかに確認できるのみで、人物像を知るすべが少ない状況です。

以下は、英俊が尽力したとされる水害予防の取り組みになります。

・鉄道の敷設

現在の常磐線は、当初現在の土浦市立田町付近を通るルートが計画されていましたが、英俊は、線路を霞ヶ浦沿いに移し、堤防の役割を持たせることで、逆水を防止できるのではと考え、ルート案の変更に尽力したといわれています。写真絵葉書「明治四十三年八月土浦大洪水汽車進行の景」では、線路を敷くために築かれた土手の上を汽車が走っており、線路が水没を免れた様子をうかがい知ることができます。高く土盛りされた線路は、堤防の役割を果たしていました。

・川口川閘門（1906（明治39）年に完成）

通常、船の行き来のために扉は開かれており、霞ヶ浦の水が町へ流れ込むのを防ぐため

に扉を閉じるしくみがありました。しかしその設置までの経緯や、扉を閉じるタイミングの難しさ等から、完成直後はあまり評価はされていなかった様子が、当時の新聞記事からうかがい知ることができます。現在は、移設された閘門の扉の一部と排水ポンプが土浦市指定文化財となっています。

色川三郎兵衛（色川英俊）の顕彰

1909（明治42）年には、功績をたたえた頌徳碑が神龍寺境内に建設されました。1931（昭和7）年にまとめられた土浦初の町史「土浦史」では、「土浦の恩人」として紹介されています。1937（昭和12）年には銅像が紅葉ヶ丘（現在の土浦市下高津二丁目）に建設されました。（頌徳碑、銅像とも現在は霞ヶ浦湖畔（川口二丁目）にあります。洪水対策に取り組んだ人物の代表として、現在まで伝えられてきました。

洪水の記憶を後世へ

土浦では、その後、1938（昭和13）年、1941（昭和16）年と大きな洪水に見舞われましたが、大きな洪水は少なくなりました。しかしまた近年、集中豪雨などが増えてきています。過去の災害への対策や備えをふりかえり、英俊の取組をはじめ、歴史から学ぶことは重要に思います。



（文責 小川）